第３部

調査結果から見た「最近の青少年の姿」について

調査結果からみた「最近の青少年の姿」について

弘前大学教育学部教授　　佐　藤　三　三

Ⅰ　本調査の特徴

本調査は、平成１０年以来、２年に１回、規則正しく継続的に実施されてきた。今回は７回目である。調査の内容は、その時々の話題を取り上げるため、各年度全く同じではないけれども、一貫して取り上げている項目も少なくない。継続性といい、県内の小学校・中学校・高等学校の児童・生徒を対象としていることといい、その時々の問題に敏感であることといい、少しばかりの誇りと自信を持っていいのではないかと思う。そしていつか、『意識調査に見る青森県の青少年の十年』などというものが誕生したらいいとも願っている。

今回は、そうした本調査の特長を生かしながら、「自己肯定観」「学校観」「メディアコミュニケーション」「刃物」「社会規範意識」の５項目を中心に、今どきの青森県の小・中・高校生の動向を、「意識」の有り様を通して概観してみることにしよう。

Ⅱ　私はダメだけどあなたはＯＫ

参照P39～46「自己への評価」

１．自己肯定観

まずは、自分のことをどう思っているか、ということから始めよう。

表１にみるように、前回調査（平成 20 年）に比べると「自分のことが好き」という、いわば「自己肯定」的な児童・生徒は、中・高校生を中心に上向き傾向にある。しかしながら、平成 10 年の調査の水準にはとどいていない。

＜　表1　自分が「好き」「どちらといえば好き」の合計　＞

学校種別	男女別	平成10年度		平成20年度		平成22年度	
小学生	男子		81%	86	75%	79	73%
	女子			63		66	
中学生	男子		65%	62	51%	63	54%
	女子			39		45	
高校生	男子		56%	50	46%	54	51%
	女子			42		48	

＊平成10年度は男女別なし

２．私はダメだけどあなたはＯＫ

今回の調査では、自分のどこが好きでどこが嫌いなのかがわかるように、前回とは違ってもう少し詳細な質問を試みた（表２）。

＜ 表2　自分の「性格・外見・成績」「友だち・家族・先生」に「とても満足している」・「どちらといえば満足している」の合計 ＞

学校種別	男女別	自分のこと			他者のこと		
		性格	外見	成績	友だち	家族	先生
小学生	男子	71%	55%	59%	94%	92%	82%
	女子	56%	38%	53%	84%	93%	83%
中学生	男子	50%	41%	33%	87%	83%	67%
	女子	40%	20%	23%	78%	81%	65%
高校生	男子	46%	27%	23%	77%	78%	71%
	女子	37%	17%	18%	78%	83%	64%

「友だち・家族・先生」等、自分の身近な「他者」については満足度が高く、肯定的に評価しているのに対して、「自分」については否定的である。特に、高校受験や大学受験を控えた中学生や高校生、そして男子よりも女子に否定的傾向が顕著である。別のいい方をするならば、中学生や高校生の多くが、「私はだめな人間だけど、あなたたちはみんな素晴らしい人間です」と言っている、あるいは心の中でそう思っている。

「友だち・家族・先生」については、「あの人の友だちと比べて僕の友だちは」とか、「あの人の先生に比べて僕の先生は」とかいったように、他者のそれらと比較して評価することはまれであるのに対して、自分のこととなると他者と比較して自分の位置や価値を決める傾向が強いことが、その原因の一つではないであろうか。

３．女子中・高校生よ、自信を持とう！

他者と比較しながら自分の位置や価値を定める視点も必要であろう。しかし、他の誰のものでもない私だけの私の位置や価値を、私自身の中に見出す視点も大切である。この二つの視点のバランスが大事である。しかしバランスがとれていないのが現実である。

先に指摘したことであるけれども、「友だち・家族・先生」等、自分の身近な「他者」については満足しているのに対して、「自分」についてはきわめて不満足・否定的である。「私もあなたも OK」という人間肯定観があって真の人間関係は成立する。「私はダメな人間だけど、あなたは立派な人」では卑屈な関係しか生み出さないのではなかろうか。そこにはいつも内向きで、自信がなくて、おどおどしている姿が見えてくる。

女子中学生や女子高校生にそんな傾向が顕著なのは何故だろうか。男女共同参画社会という追い風が吹いているのに・・・。

Ⅲ　学校生活が「楽しい」理由

参照P16～17「学校生活への満足度」、P18「学校生活が楽しい理由」、P19「学校生活が楽しくない理由」

１．友だち、クラブ活動、学校行事

平成 18 年度からの調査項目であるが、学校生活は「楽しい」という児童・生徒が少しずつではあるが増えている。

「楽しい」理由については、即ち、第１位「好きな　友だちがいるから」、第２位「クラブ活動や部活動が楽しいから」、第３位「学校行事が楽しいから」である。これは、平成 20 年の調査と全く同じである。

また「学校が楽しくない」理由も、小・中・高校生のすべてに共通していて、第１位は「授業が楽しくないから」、第２位「嫌いな先生がいるから」、第３位「嫌いな友だちがいるから」であった。

＜　表3　学校生活は「楽しい」「どちらかといえば楽しい」の合計　＞

学校種別	男女別	平成18年度		平成20年度		平成22年度	
小学生	男子	89	90%	85	88%	92	94%
	女子	90		91		95	
中学生	男子	80	84%	87	85%	87	87%
	女子	88		83		86	
高校生	男子	80	78%	77	79%	84	83%
	女子	76		80		81	

２．人間が人間を直接支える仕事

学校の本質は「授業」にあるけれども、その本質を支えるのは、「友だち」であったり、「クラブ活動」であったり、「学校行事」であったり等、授業以外の要素であることを本調査は明らかにしている。いいかえるならば、教師は、授業にだけ神経を集中し、頑張ればこと足りるのではなく、児童・生徒の学校生活の全体に対する目くばりが必要であることを意味している。あるいは、教師という仕事は、多面的のみならず繊細でとてつもなく広くて深い包容力を必要とされるような全人的な仕事である、といってもいいであろう。

人間が人間を直接支える仕事は、それほど多くはない。介護とか看護といった医療関係の仕事と教育関係の仕事が主たるものである。現代社会にあっては、人間が直接人間を支える仕事に対して、もっと手厚いサポートをするべきではなかろうか。

Ⅳ　メディアコミュニケーション

１．パソコンも日常的なツール

参照P55～56「携帯電話の所有状況」、P60「自由に使えるパソコンの所有状況」

小・中学生の場合、学校が携帯電話の所持を原則禁止しているため、所持者は特別の事情をもった少数者に限られる。女子児童・生徒に所持者が多く見られるのは、防犯等の「特別の事情」を配慮してのことであろう。しかしながら、携帯電話は持っていない小・中学生であっても、「自分が自由に使えるパソコン」を持っている者は多い。小学生 49 %、中学生 55 %が「自分が自由に使えるパソコン」を持っている。二人に一人というのは注目すべきであろう。高校生になると、ほとんどの者が携帯電話を所持していると同時に、63 %の者が「自分が自由に使えるパソコン」も持っている。もはや携帯電話だけでなくパソコンも、児童・生徒にとって日常的で不可欠なコミニュケーションのツールとなったとみていいであろう。

＜　表4　「携帯電話を持っている」「自由に使えるパソコンがある」児童・生徒の割合　＞

学校種別	男女別	専用の携帯電話を持っている		自由に使えるパソコンがある	
小学生	男子	9	11%	46	49%
	女子	12		52	
中学生	男子	9	15%	54	55%
	女子	20		56	
高校生	男子	98	98%	62	63%
	女子	98		64	

２．携帯電話とパソコンの使い分け

参照P57～58「携帯電話の使用目的」、P61～62「自由に使えるパソコンの使用目的」

児童・生徒は、携帯電話とパソコンを使い分けている。携帯電話は家族や友だちに「電話」や「メール」を送ることにもっぱら利用し、パソコンは、「動画を見る」「趣味や遊びのことを調べる」「音楽や画像のダウンロード」等に利用している。児童・生徒は、もし仮に孤独であるように見えることがあったとしても、彼らは、我々の目には見えない広大な情報の宇宙の中にあって、それらを制御しあるいは操られながら、人間社会とのつながりを楽しんでいるのであろう。

＜　表5　「携帯電話」「自由に使えるパソコン」の利用目的(全体)　＞

	携　帯　電　話	自由に使えるパソコン
第1位	友だちに送るメール(86.9 %)	インターネットで動画を見る(73.4 %)
第2位	家族にかける電話(72.8 %)	インターネットで趣味や遊びのことを調べる(63.7 %)
第3位	家族に送るメール(86.9 %)	音楽や画像のダウンロード(44.0 %)
第4位	音楽や画像のダウンロード(56.0 %)	インターネットで勉強のことを調べる(26.9 %)
第5位	友だちにかける電話(52.0 %)	オンラインゲーム(26.5 %)

３．「年齢制限サイト」へのアクセス

参照P64～65「年齢が制限されているサイトへのアクセス状況」、P68「フィルタリング機能の認知状況」、P69「携帯電話のフィルタリング機能利用状況

上に述べたように、革命的なコミュニケーション手段あるいは情報の泉としての携帯電話・パソコンは、もはや児童・生徒にとって物珍しいものではなくなって日常化した。そして、それらは、彼らを、「年齢制限サイト」の世界へと誘うこともためらわない。

＜　表6　「年齢制限サイト」へ「よくアクセスしている」・「ときどきアクセスしている」合計　＞

学校種別	平成18年度	平成20年度	平成22年度
小学生	5.4 %	6.7 %	3.8 %
中学生	20.4 %	17.0 %	13.6 %
高校生	56.1 %	45.7 %	36.6 %

「年齢制限サイト」へのアクセスは、年々減少傾向にある。とりわけ、もっともアクセスの多かった高校生の減少傾向が著しい。フィルタリング機能についての理解（高校生の 95 %が知っていると回答）や実際にフィルタリング機能を有効にして使っている児童・生徒が増えている（小学生 30 %、中学生 35 %、高校生 39 %）ことが影響していると思われる。

＜　表7　フィルタリング機能についての理解と利用状況（携帯電話）　＞

学校種別	フィルタリング機能についての理解	利用状況(携帯電話)
小学生	32.5 %	29.5 %
中学生	49.8 %	35.0 %
高校生	95.2 %	38.6 %

４．学校裏サイト

参照P66～67「学校裏サイトへのアクセス状況」

前回調査結果と同様に、学校裏サイトへのアクセスは少数である。

＜　表8　学校裏サイトへの「よくアクセスしている」「ときどきアクセスしている」の合計　＞

学校種別	平成20年度	平成22年度
小学生	1.3 %	1.5 %
中学生	7.9 %	3.7 %
高校生	25.2 %	8.6 %

Ⅴ　刃物の使用

１．刃物のもち歩きは減少

参照P80「刃物の携帯状況」

平成 20 年度の調査時には、刃物を持ち歩いたことのある児童・生徒は 10 %前後であったが、今回の調査では４%強へと減少した。

＜　表9　刃物（学校で使う以外）を持ち歩いたことがあるか　＞

項　目	小学生	中学生	高校生	全　体
ある	1.8 %	6.7 %	4.0 %	4.2 %
ない	98.2 %	93.3 %	96.0 %	95.8 %

２．刃物は生活の道具ではなくなった

参照P82～84「刃物の使用場面と頻度」

他方、家庭での調理で包丁等の刃物を「よく使う」児童・生徒は、小・中・高校生ともに 40 %前後に止まるのに加えて、男女差が著しい（男 29 %、女 51 %）。依然、男子厨房に入らず、の傾向が顕著であるといえるであろう。あるいは、男女ともにあまり家事の手伝いをしていない、そういう機会を与えられていない、といういい方もできるであろう。

家で、工作をすることがあって刃物を「よく使う」児童・生徒は、小・中・高校生ともに 15 %前後、「たまに使う」は小学生 49 %、中学生 39 %、高校生 30 %であって、学年が上がるにしたがって刃物を使う機会が少なくなっていることがわかる。

また、「家族でキャンプ」などをするときも、64 %の児童・生徒が「使わない」という。もはや、児童・生徒にとって、刃物は生活にとって必須の道具ではなくなった、といったら言い過ぎになるであろうか。したがって、街中に刃物を持ち出す児童・生徒がもしいたとするならば、それは異常な状況であり、特別な何かを意味するサインと見ることもできるのではなかろうか。

＜　表10　刃物の使用頻度と場面　＞

	学校種別	男女別	よく使う		たまに使う		使わない	
家庭での料理	小学生	男子	27	39%	58	53%	13	8%
		女子	50		47		3	
	中学生	男子	29	41%	53	48%	18	11%
		女子	53		43		4	
	高校生	男子	30	41%	53	47%	17	12%
		女子	51		42		8	
	全　体		41%		49%		10%	
家での工作	小学生	男子	17	15%	45	49%	37	36%
		女子	14		52		34	
	中学生	男子	19	17%	37	39%	44	44%
		女子	16		40		44	
	高校生	男子	11	12%	32	30%	57	58%
		女子	14		29		57	
	全　体		15%		40%		45%	
家族でキャンプ	小学生	男子	8	7%	31	31%	61	62%
		女子	6		31		63	
	中学生	男子	8	9%	28	25%	64	66%
		女子	10		23		67	
	高校生	男子	10	8%	35	28%	55	64%
		女子	6		23		71	
	全　体		8%		28%		64%	

Ⅴ　善悪基準の曖昧化・混沌化

参照P86～92「生活規範に対する意識」

１．前回調査の問題点

前回（平成 20 年）及び前々回調査（平成 18 年）でも小・中・高校生の全体を通じて、「何が良いことで、何が悪いことかの判断が、極めて曖昧になり、混沌とした状態に陥っている」と、強く指摘してきた。しかし同時に、「選択肢に問題がある」のではないかとの疑問をもち、前回の本稿では、次のような疑問も提示しておいた。

> ある小学校の先生から次のような指摘をいただいた。この問いの解釈に大きな影響を与える事柄があるため、参考までに付記しておきたい。
> 「次のことについてどう思うか（問題ないことか、やや問題のあることか、大問題であることか)」という問いを「私（児童）自身にとって問題ないかどうか」と問われていると考えて、「問題ない」を選んでいる児童も中にはいたようだ。ほかにもそう考えて回答している児童・生徒がいるとすれば、結果が異なってくる可能性がある。
> したがって、次回の調査では、問いや選択肢の表現を変えてみる必要があるだろう。

そこで今回の調査では、質問文は変えずに、選択肢を「悪いことではない、やや悪いことだ、悪いことだ」に変えてみた。その上で、表１１に、「悪いことではない」「やや悪いことだ」と答えた児童・生徒の割合を表示してみた。「やや悪いことだ」は、「悪いことではない」という考え方に近いニュアンスを持っていると考えたからである。

＜　表11　生活規範意識・「悪いことではない」「やや悪いことだ」と答えた児童・生徒の割合　＞

項　　目	小学生	中学生	高校生
いつも遅刻をする	37 %	40 %	49 %
友だち同士の約束を破る	22 %	25 %	23 %
自転車の二人乗りをする	22 %	46 %	67 %
気に入らない相手を無視する	25 %	40 %	46 %
気に入らない人の悪口を電子掲示板などに書き込む	6 %	15 %	15 %
自分のプロフや写真を直接会ったことのない相手と交換する	23 %	44 %	60 %
親や先生、友だちに暴力を振るう	6 %	15 %	15 %
制服の長さを変えて着たり、髪の毛を染めたり、化粧をして登校する	23 %	39 %	69 %
ピアスやﾀﾄｩｰ（入れ墨）をする	23 %	31 %	57 %
未成年者がお酒を飲んだり、タバコを吸う	5 %	19 %	40 %
覚醒剤やドラッグ（薬物）を使用する	1 %	3 %	4 %
万引きをする	1 %	4 %	6 %
いじめをする	5 %	11 %	10 %

２．やはり生活規範は曖昧化している

結果は、一部に前回調査と異なる傾向が現れたものの基本的には、これまでの調査結果と同様に、「何が良いことで、何が悪いことかの判断が、極めて曖昧になり、混沌とした状態に陥っている」と指摘していいであろう様な傾向が示された。「価値観の多様化」といった分析あるいは表現も可能であろうけれども、「多様化」してはならないものもたくさんこの調査項目の中には含まれている。

この表を見て、感じたことを列記しよう。

①覚醒剤と万引きについては「悪いことだ」との判断が明確である。
②いじめについては、あれだけニュースになり、根絶キャンペーンが展開されているのに、まだ１割もいるのか、という思いが強くなった。
③親や先生への暴力についても同様である。
④どうして遅刻することに寛大なんだろう。
⑤自転車の二人乗りやお酒やたばこは、彼らの間で常習化していることの表れなんだろうか。
⑥ピアスや入れ墨は、今はもう、巷にあふれていることだから肯定的なのだろうか。
⑦気に入らない相手を無視したり、悪口を電子掲示板などに書き込むことに、余り罪悪感を感じないのは何故だろう。
⑧自分のプロフや写真を直接会ったことのない相手と交換しても平気なのは、何故だろう。直接被害が及ぶようなことは起こらないだろうと信じているからだろうか。それともバーチャルな世界とでも思っているのだろうか。疑問ばかりが増してくる。

最後に、こうした生活規範に対する意識傾向は、実は保護者の意識傾向に極めて近似する、影響を受けやすいということを指摘して稿を閉じたい。